久米新話 一

へ 13
3363
1

[illegible]

名木乃伐傳大全　惣目録

巻之一

一　丹波名護屋木太刀の事
并法沢寺妖怪の事

巻之弐

一　丹波[illegible]事

大正十年八月廿九日寄贈
日本大學出版部

門 へ 13
號 3363
巻 1

一 銀作鏡は両面に有力を走らせし事
一 銀作剣の邪神を法縁る事

巻之二

一 丹波様家に名拖しる事
並名古や高木舞曲の事
一 浅野家亀田道江の事
並丹波名古屋高木

巻之四

一 将軍家御目通りの事
一 名古屋山三郎掛碁の事
並古木の説の事

巻之五

一 高木か宅小松町にて月見会の事
並喧嘩の事

一 檀那殺生好む事
并名古屋浪人別の事

巻之六

一 不破百姓殺害の事
并名古屋山三討手の事

巻之七

一 山三名古屋勝負の事

一 不破改名鍼術師範の事

巻之八

一 幡随院長兵衛腹立の事

巻之九

一 桜井庄之助彦坂が宅へ鞠を蹴込事
并若党桜井が家来[illegible]

打擲の事

附り彦坂甚八と打札武勇の事

巻之拾

一 不破伴左衛門傳通院長老と仕合の事

一 伴左衛門山三郎を討て立退事

巻之十一

一 山三郎併三左衛門歌謡小出る事

一 名古屋三左衛門病死の事

巻之十二

一 平井権八辻切の事

巻之十三

一 高木平之丞非人と成り候て被

陣ばの行衛と敵討之事

巻之十四

一 瑞遠院(?)殿高木千之助(?)小次郎(?)彼

鉢(?)かつが身(?)と若(?)殿(?)人之事

一 千之助(?)関口(?)伊勢(?)御小出合

海(?)御(?)修練(?)の事

巻之十五

一 高木(?)小次郎(?)彼備後の酒ざかひ

地蔵流(?)師(?)之出合の事

一 礒や大八(?)…(?)味の事

並に大八白状之事

当日流(?)…[illegible]

巻之(?)…

破(?)家の月上りまんまる[illegible]

経(?)古屋(?)…の口の中へ大八(?)…

童奈取ゆ

一般海ねて

扇まで

名木乃伐独大全巻之壱

目録

一 不破名古屋高木敵之風来

并法龍寺妖怪風来

名古屋行脚大全巻之壱

丹波名古屋多久左衛門之事

無住寺妖怪の事

作州津山の城主十八万石森大内記

御家臣の中に名古屋山三郎元春

丹波伴之丞重勝と云者一列

三人とも武勇ありて三勇士と呼れ

約束ハ
客を待し
月見かな

てめ木

やがて右二人は元来蒲生下野
かれ家臣なりし小姓を勤めし
其ころは二人ともに紅顔なりしが
たくましく後生ねがひの為とて
つゐに出家をとげはてにける
若松の城より大町通のかたはら
法龍寺といふ禅寺はこの寺

にすみし法華経はじまき無常の
如く今ごとしは四季の果
ける佛菩薩文殊菩薩もずい願
との正にござる古寺なる一家観
ぞくもあさ人のしぬる時に
此寺は由来ありしつ無縁の
佛の百人ともに温しもなく

ちかう和くハ不破伴左衛門ハいかにと
十六歳にて初名を伴作とかや
名古屋山三郎ハ十六歳にて本年
ことしまで十七歳なりしゆゑもたれる
本年に御中節しなりまで是をまで
親しく三人百姓の中にもすぐれし己の
時まんなりしかあらそひくあらそひの

勇気とて名たかし見えけれども是
ぞと思ふものハさて国中にはなかりしぞ
あらそひの勇者のなかにも志をすゝまざる
ありさまのうちにあらそふ法輪寺
中といへる敬をしる御法師
まぬかれし人の由井の荒寺にわかれ
幸ひ今日にて示現あらん曽我兄

とのさびしき夜にいるしらで衣服(いふく)
重(かさ)ねつくとのはしきして必定(ひつぢやう)
かり今夜(こんや)のやみをきらうで通(つ)
法華経(ほけきやう)読(よ)むれおぼえにいまそうらく
御(や)しるかしのきもをかりし辻(つじ)
らんくいかにいとしやせ三郎作(さく)
らくおもふ絶(ぜつ)にしかず

るかしの性根(しやうね)をおもしこらん
無残(むざん)だのこいかに無残(むざん)ききしらく
いかなる道(みち)ならさ魔所(ましよ)なるくも
大蛇(だいじや)なくのしんぽもつききやく
の母子にわもおろういぶ一面(いちめん)て
家(まん)にかれはいそ胴(どう)かるもしい
無(ぶ)くれくて鐘(かね)を家(まん)るまうじ

し流人やのくはして檀作女ハ
法龍寺にて名代の麻尼なれバ
終れくも所はさるなれバ後
も秘し流人がかりゆく年
らんとの御としけてその日にて
別れくの内へ御りね数日毎け
まして書ハまん〻難しけ障

御しるまゐり四ツの時の鐘ゆる
浦谷屋山三郎ハ大小が常の衣
うきうちらずり志る足の紅縫と
と枝につきくる不事にゆら
為に事ゆく寄もの小像にして
愛やの約束いさや法龍寺へ
参りんといつてそ年に御中にるハ

音楽にきこえて今宵まかりしかんと
思ひは父にいとゞ母御前にはあれども
父にをくれとゞまりつる残念さに
ら参りけるかゞしたしける三位之御
心中をかくちて胸ひらきけり
正体なくなりしかど竜宮にはあれども
今宵夢さへ小袖にてこそあれど

たくさん性ましかりしと見へける
又昔は我も人にて法龍寺に
いますり性をも見んと
ありし時母今宵夢をいふ
婦ゝれゞ我も宮
小僧のかく体まんれども母の
くはしき人なくてその夜の九つころ

こゝに法輪寺の門前にはいまそかりける
の雪の里にかしこき男だに卒
塔婆の中に結ひける浮木切中づり
法輪寺へ志の人々の通ひ夜
更て愛に主いんとの茶しか
和にかしいとおりかしにい
うける劉の媼母いんとつびく

浮に入て龍と男れてる浮木昔
あり山三郎大臣がらうき和に
雪にさそひしに父上のゆうし
あらぬかたに今遠入かく愛り
菊ふくて年心切びし年而
出生へていひし御雲八御先せん
刹せしゝ出あれ小細かんと

いはしゆ夜彼岸の大物をく
末ゆんとひきゆくにて一念にて
末ゆんしれて勇猛あひとに
しかも実にもとゝいへ心に悟を
いつありしく秘せき人
末ゆんゆ照遊しり末在
物して告云を見へ御ふく

一人ゆゝく事りのかゞ志うしかど
武人出て當寺に妖怪出すめし
見んと文よりも本もとに出もり
て見れて庭限しゆかれ留れ
くべきとおもちく雪後にみ実に
とのはこさ事なり純をとも
両人とのやともやらん山之御中れる

八珍作が性根のかげも見えなく
なり日ごろつきそひし川きよし
口惜きくとも又ぞし今宵は心得
うしろへかへりいかなる思
識をもかきうし仕留らるたるの
勇気のかげ残るはさんと
当濡しく彼方小袖を志ん

しらぶみ濃く寂莫ともの
まごし比しも思ふ川のふ
かく遠寺のかねも浮き寝る
折ふしあはひもうかれまよの
上りうち浮かしくれ夜人の影
いとつきりと投けれ山の端
仏坊寄りと竹を以て立し

く乙女はくはつきとしせバ
まつりしも手にあてへ志まゝり
志かれども其のうちかまつらず
かくいかゞるよのことかまと
志かしれ山三郎謎伴つれまへらく
さりし見れども正しき人間へ
されどもはつらしきつらしも云さ

ろくん路かしくはりしとも
とめて是を見れども人へ
はしさ年しのはりしとおそれ
年り役小はかりはれとも十三町
の道を廻く城下湯屋へ立
よどりはれども山三郎妖怪
をつきとめらく見人本堂小

抑そも／＼ある人の男氣ハいづれも
甲乙ハいにしへ年の始ハ繁昌
れ酒屋小手ハ戸をたてけ
ざりしを其夜ハ年こしをむかれて酒屋
の若とのも三人参りて
様火小河てりしるず夜更て
戸をたゝき大いに申

ゝ今河とのもとを申しいくぞ
愛とけよ閑事とも申せば
是人の若とのの愛とも大きに
と様ふ申させ給へ戸をたゝく
きく大いにおどろきさこれハ
高木竹の若殿様かゝ今河ら
此大雪小河の閑とおどろかれバ

イヤかゝる子細(しさい)はつゝたゞ一人(いちにん)夜(よ)
うちいそぎ灯挑(てうちん)はいそがし
ゆくといへど折(をり)あしくきえてちやうちん
は御座(ござ)なくは御(お)ん灯挑(てうちん)なくてもよく
るしかゝれど差上(さしあげ)申さん
とりふ仏(ぶつ)出てもくるしかんじん
とくく白浪(しらなみ)に無縁法界(むえんほうかい)とうきさ

ゑらうてうちんともしまします
しや法龍寺(ほうりうじ)へ立(たち)よりける十二
町(てう)の夜道(よみち)事(こと)にふりつむ雪(ゆき)を
ふみわける事(こと)也へは大(おほ)いなはゞ
ぢりくし迄(まで)に七(なゝ)ツもころうつり
さらゝへりける山(さん)之命にして死人(しにん)
ともつゐにはいま心(こゝろ)うく

まういぎきゆく〳〵ふしいかそうり
かれもて流石の年〳〵めし山三郎
が大丈夫ゆと顔〳〵吾ふ〳〵て
いせりおこし〳〵れどうふ〳〵
とゆうなかゆけ〳〵狗事も
おうアしやといへしぶて山三郎目と
さなく〳〵物〳〵事のおらさや

かりし事くとまうし〳〵家様
ぐ〳〵りうなられ〳〵山三郎
目とさな〳〵是内へしと志きり小
情られどうふ〳〵小目と見れ
気いき年〳〵御親雪中とや衣
中とや別〳〵出来
かめ当ものときつうしなる秘

まくらの中しまつりいりおる物(まめ)
ハ男(こ)なれどもりやう両人(りやうにん)相当(さうとう)のくらく
し男(こ)なれバ死期(しごさち)の日も以前(いぜん)ハ
死(し)しせる死人(しにん)なりけるまでぞ
両人(りやうにん)ともおきれざく打(うち)よりおや
しこらり因(さてまこ)又この死人(しにん)天井(てんじやう)
より落(おち)さるハいかにしてもい

ぶかしといふ時(とき)ならうつぎりけれ
上(うく)ありてかりいしと数(かず)の幕(まく)ありけり
まらしてせきのさいおきさいざんおんれ
と両人(りやうにん)そうらうちらしく天井(てんじやう)
物男(こ)なれとおりひもよらんだ
ふ彼(かの)体(ぞんさく)にかられ共(いそ)ぎしこ
なきてまず両人(りやうにん)の死(しく)のおしんじあハ

ろくさいぐそくしてひきゆく竜
人いまこそ性根のほどしらぬ沈
孫あり宣ひどもの方より何
まし付連さうて舞ゆうて
ひきゆくありさまぞとも納り
曲ありし神なとてありして
まくにひるあはせのり宮に来

みことありけり左近めしてある竜人
れうさいしも是非なんらずあし
たゞかしこぞある竜人の性根をため
さんとかれこれとも工夫し
見ん心ありし幸ありとあきすの
ふかくよりの新仏と見文
まし是化天のかゝへと王宗が

筆をして畜中ありけり
御し細引にて引しめこの
うつむけに引けば我もも
にらむ上り今死
遂しと死人をみてねま
しかばりんかたがりし宿
浪人来しくかゆへともや

次男に浄受りしかへはら
ハよしと天井より縄付て
性根を男にて晴しとやり
けるゆへ名古屋高木の浪人も
律詮が大膽不敵なることを感
しけるが後小笠原家ニ百士と
せられしも尾なりとかや

磯栄の家も

高砂や

秋の月

破栄庵

名木名所傳大全巻之壱終

今宵は萩の本や

菊畑や尾花の傘の行処

東のさく